

横浜国際港都建設審議会

第1回起草委員会

平成17年9月13日

《出席委員》明石康委員（委員長）、福田幸男委員（第1部会長）、  
小林重敬委員（第2部会長）、跡田直澄委員（第3部会長）

議事

【事務局】 それでは、第1回の起草委員会を開催させていただきたいと思います。本日は1回目でございますので、横浜市副市長から一言ごあいさつをさせていただきたいと思います。

副市長ごあいさつ

【事務局】 それでは、委員長よろしく願いいたします。

【委員長】 最初に一言だけごあいさつさせていただきます。現在の日本は1つの大きな時代の変わり目に直面しており、日本の中での各都市、またそこに住んで仕事をしておられる市民の人たちにとっても、やはり今までを顧みて、自分たちが今どのような立場におかれているか、これからの日本をどういうふうにつくっていけばよいのかということについて、みんなが虚心坦懐に語り合い考えながら、骨太の将来構想、未来構想というものを描く大変よい機会なのではないかと思います。先日の総選挙の結果も、やはりこの国がいろいろな意味での大きな変革の入り口に立っているということ、今まで政治に関心のなかった階層までもそのような意識を持ち始めているということを示したのではないかと思います。今までも、この国の中で非常にユニークかつ大きな役割を果たしてきた横浜というまちが、国内で、また世界の中でどのようにあるべきか、どうあることが可能であるかということをお客様と一緒に考えさせていただく好個の機会であると思ひ、自分の身のほども省みずにこのような役を務めさせていただくことになりましたので、いろいろとご指導のほどをお願いしたいと思います。

私はいろいろな審議会に参加させてもらっておりますが、事務局がつくった資料などをみんなで納得できるまで徹底的に意見を交わし、一定のコンセンサスに基づいてビジョンをつくっていくべきであり、時間の許す限り議論を行えばと思っておりますので、ご協力をお願いしたいと思います。

それでは、最初に、各委員の皆様からごあいさつをいただきたいと思ひます。

#### 各委員ごあいさつ

**【委員長】** ありがとうございます。私は1955年、まさに今から50年前になりますが、横浜港に今でも繋留されている氷川丸に乗りまして、フルブライト留学生として10日以上かけてアメリカのシアトルに上陸したという記憶が今でも鮮明にあります。そういう意味でアメリカ太平洋地域のみならず、世界への窓として横浜が歴史的に果たしてきた役割というものを私は強く感じておりますし、明治維新と敗戦後の日本という2つの開国を経て、グローバル化の今の時代に、ある意味で3回目の開港をむかえるという文脈の中で、横浜の将来構想と一緒に考えていくよい機会になるのではないかと期待しております。

それでは、次に、起草委員会の役割や、今回の審議内容について資料がございますので、事務局からご説明をお願いします。

#### 事務局から資料説明

**【委員長】** ありがとうございます。それでは、各部会の部会長さんから補足的な説明がございましたら、いただきたいと思っております。まず第1部会からお願いします。

**【第1部会長】** 第1部会は、20年後の横浜の人口構成などの基礎的なデータに基づいて、少子高齢化社会のある種のイメージを描きながら、今後の横浜市のあり方をどうしていくかということからスタートしております。基本的には、実際に現実化している少子化と高齢化や、人口減少社会というこれまで我々が経験したことのない社会が到来するであろう中で、いかに市民が快適な生活を維持するか。そのためにさまざまな施策を考えていかなければいけない。と同時に、全国的な少子高齢化の中で、横浜の持つある種の特異性ともいえる比較的人が集うまち、大都市という視点も考え、働く世代をかなり重視した考え方も盛り込んでいきたい。そのような都市の魅力をやはり入れていかないと、全体のバランスがとれなくなってくるだろうという意見もかなり出ておりました。

それから、第1部会はどちらかというと人の暮らしに着目しておりまして、生涯発達の視点からの議論や、子どもにとってあるいは若者にとって、さらには高齢者にとってというライフステージに基づいた議論をかなりすすめてまいりました。それが今回の中間とりまとめにもなっているわけでありまして。

それ以外にも、例えば男性、女性という性の問題であるとか、あるいは障害者の問題などもかなりきめ細かく意見が出てまいりました。そのあたりもとりまとめ、一生涯にわたってこのまちに住み続けられるというような方向性が出てくるといいなということをか

り議論してまいりました。ただ、あまりにも問題が広いものですから十分な取りまとめになっているかどうかというところは先生方からまたいろいろご指摘をいただければと思っております。

【委員長】 ありがとうございます。第1部会の中間とりまとめについてご質問などはございますか。

【第2部会長】 6つの項目がここに並んでおりますが、6つの中の一番上と一番下の項目は、我々の部会でもかなり議論したところですが、特に一番下のこれからの都市の担い手、それが市民であって、その市民がいかに連携しながらまちづくりにかかわってくるかという視点。我々もまちづくりというのはただハードのまちづくりだけを意識しているわけではなくて、もっとソフトな議論まで含めて議論していますから、この6番目の議論あるいは1番目の議論は、どのような形で住むかという視点で、第2部会の右側の一番上や2番目の議論にもかなり深くかかわっているような気がします。この辺をお互いにうまく分担しながら、議論をより明確にしていくことが必要になるだろうという感じがいたしました。

今、我々がまとめているのは、いろいろなものをとりあえずこの枠の中に投げ込んでみて、どうだろうかという作業をしておりますので、これを少しずつ削って行ってそれぞれの部会が担っている役割を明確化していったほうがいいのではないかという感じを持ちました。

【第1部会長】 ご指摘のとおりで、部会の審議の進め方の中でも、とりあえず他の部会とオーバーラップすることを見越して議論を進めてきた経緯もありまして、実際にこの先は少し調整をしていかなければ、なかなかその方向性が見えてこないのではないかと思います。それを議論の一応の前提としてきたということをご理解いただきたいと思ひますし、これから調整をぜひお願いしたいと思っております。

【委員長】 3つの部会からのイメージやテーマが重なっているところに関しては、全体都市像というところで集約的にはっきりした形で取り上げてはどうかと思ひます。まさにこの部分は起草委員会が作成するということになっておりますので、事務局の助けを得て、そういう3つの部会が共通して問題意識としている横浜の都市としてのビジョン、将来的なあり方、そういうものについて集約的にそこで取り上げることが望ましいですし、また可能ではないかという感じもいたします。

【第3部会長】 同感です。第3部会は特に行政の問題を取り扱うわけですが、行政を

いかに効率的にしてスリム化しながら、横浜市民に不満を抱かないようにしていただくかという点では、市民の方々にコミュニティーでの活動を一生懸命していただかなければいけない、多様な地域の担い手が出てきてもらわないともうどうしようもないという視点があり、第3部会の上4つぐらいは、内容的には全部ほかの部会に書かれていることと基本は同じようなものでして、ただ、キーワードとして一番上は地区経営という言葉が入っていると、4番目のところでは市民力とかという言葉が少し入っているぐらいで、かなりの部分が内容的には重なっておりますので、その辺の調整をしながら、できれば横浜市効率化という視点、小さな政府、横浜型小さな政府の実現ということを1つの前提として、皆さんの部会でまとめている内容にも反映できればというのが、最後の取りまとめのほうでお考えいただきたい点と考えております。

**【委員長】** ありがとうございます。確かに横浜型とか横浜らしさとかいろいろありますが、ここもその意味していることがどういう内容のものであるかについて、最初の部分で説明があれば親切だったであろうと思います。

それから、この第1部会の部分で、言葉にこだわるわけではないのですけれども、だれもがゆっくり、ゆったりと安心して暮らせる都市。ゆったりと安心して暮らせる都市というのはよくわかるのですけれども、ゆっくりというのとゆったりというのは違うと思うので、私は今のグローバル化しつつある日本において、また横浜において、あまりゆったりしているとグローバルな競争に立ちおくれるおそれもありますし、かといって心理的に精神的にゆったりしていないとだめだとも思うのです。そのあたりはいかがでしょう。

**【第1部会長】** これは第3回の審議で出てきた、ゆっくりというか、最近のスローライフという視点で、若者から始まって高齢者までいろいろな人たちが住まうまちの中で、今まではある意味ではスピードアップして効率化を図ってきた。しかし、今後20年を見越していくと、ゆっくりとした生活も一方で認めてあげたいというような、そういう趣旨の発言がありまして、あえてこういう言葉が入ってきた経緯がございます。ですから、多様な人たちが住まうということを考えたときに、1つの物差しでは切り切れない、住み方も生き方もかなり幅を持たせるという意味合いをもっているわけで、これは皆さんにもご意見を伺いたいと思います。

**【第2部会長】** 我々の分野とも少しかかわるのですけれども、私は1つはグローバル化の流れの中で、それに伍してしっかりした都市をつくっていくという部分が必要であって、一方で、そういう層があるとすると、もう一方で、お話しのようにゆったりと地域の

資源を生かしながら生活するという、そういう二層をなす構造が都市の中にあるということがこれから必要ではないかと思えます。今までは、皆さん方向性は同じで、全員一方向に向かって発展する、成長するという形でしたが、これからの都市はどうもそれだけではないのではないか。そのことを何かうまく表現できないか。それがおそらく「ゆったり」という言葉で表現しているのですが、ただ全員がゆったりしても困るので、その辺をどううまく表現していくかというのが工夫のしどころだと思えます。

**【委員長】** もう1つ、表現上の問題ですけれども、第3部会のところで、すべての市民がいろいろな形で参画する活動の重要性を指摘されているのはそのとおりだと思いますけれども、おそらく市民の一部には自分たちはそういう活動に参画しない自由もあってほしいと思うかもしれませんので、これはみんながすべてこういう活動に参加するというのではなくて、あくまでも自発的なものであるということは一貫しておく必要があると思えます。

それから、第1部会が挙げているいろいろな視点は、まさに少子高齢化に我々が直面する上で必要なことがきちんと列挙されております。子どもの問題、高齢者の問題、障害者の問題、女性の問題も取り上げておりますけれども、女性の役割についてちょっと何か言及が足りないような気もしないことはないのですが、いかがでしょうか。

**【第1部会長】** 非常に難しい問題の1つですけれども、あえて女性を取り上げて言及するのか、そうではなくて一般的な表現の中で特定の配慮をしていく形がいいのかという議論もありました。

それから、同様の例として、少子高齢化の中での子育てとか子どもを持つことに関する議論もしてきたわけです。ただ、その選択はあくまでもその個人にあるということもありまして、最初は結構勇ましいキャッチフレーズを掲げたのですが、あくまでも価値観の多様性とか選択ということを重視していきたいということになると、だんだんこのトーンが薄れてきて、何となくわかりづらくなってくるような部分があるかなということでもあります。

ただし、女性の問題については常にこの中に十分配慮した形で盛り込んでいかなければいけないという合意はできているのです。それを言葉として1つしっかり表現するか、あるいは何らかの形で全体的に盛り込んでいくかということになると思えます。

**【委員長】** ありがとうございます。第2部会の扱うグローバル化関連のところですが、この2番目の囲みの中に、また1番目の表にも、世界、アジア、国際都市横浜とあります。

また、空の港と海の港を使ったアジアとの連携強化。アジアとの連携強化はまさに大変重要なことですが、横浜と世界との間にアジアだけがあるわけではなくて、ここはアジア・太平洋地域とか、もう少し広げたらどうかと私は思います。おそらく福岡や広島とか大阪とか、また日本海に面した都市もそうですけれども、そういうところはアジア重視の姿勢が非常に強いのですが、横浜の横浜らしさの1つは、まさに全方位的に世界を見ているということでしょうし、アジア・太平洋というふうに少し広げると、アメリカやカナダとか南米とかオーストラリア、ニュージーランドなどまで入ってくると思いますが。そこはいかがでしょうか。

【第2部会長】 実は経緯がありまして、つい先日一部会を開いたばかりなのですが、その部会の前まではアジアもなかったのです。実は世界だけだった。それだけではまずいのではないかとということで、急遽アジアが入ったという感じで、まだ十分こなれていないと思います。委員長のお話ありがとうございましたので、その辺も含めてもう一度部会で議論させていただきたいと思います。

【委員長】 ありがとうございます。そういう意味では我々の今までの議論から、全体都市像の部分がとても重要なものとして浮かび上がってきているのではないかと思いますので、我々、次回の起草委員会までにできれば審議のたたき台になるような、全体都市像の素案みたいなものを事務局側に作成していただければと思いますが、それは可能でしょうか。

【事務局】 本日もご意見をいただきまして、それをもとに事務局のほうで少し素案を固め、個別に各委員、また委員長とも調整させていただきながら、次回の起草委員会では素案という形でお出しできるようにすすめてまいります。また次の第2回総会が10月5日に予定してございますので、それまでに少し議論ができるような形に少し中間的なまとめをしていきたいと思っておりますので、それにつきましても個別に調整をさせていただきたいと思っております。

【委員長】 よろしく申し上げます。

【第2部会長】 委員長にお聞きしたい点があるのですが、第2部会の最初の1番目の欄と2番目の欄は、実はある意味では対をなしてございまして、一番上の最初のところはグローバル化にいかに関係が対応していくか。それを積極的にやりましょう。現在もそういう方々が暮らしているけれども、さらにそういう方々を育むような仕組みをいろいろ考えていきたいと思います。

ただ、グローバル化の流れの中で、ほんとうに自分は何なのだということを忘れてしまったグローバル化というのはあり得ないとする、横浜の持っている独自性、そういうものをしっかり持っている、そういう意味での個性のアピールというものが当然必要であって、グローバル化すればするほど逆にそのことが重要になってくるのではないか。そういう対の言葉として1番目と2番目を位置づけて考えたらどうかということになっているのですけれども、そういう考え方は委員長立場から言うといかがでしょうか。

**【委員長】** 大賛成でございます。まさにグローバル化すればするほど自分のアイデンティティーの意識が強まらないと、自分というものを失ってしまうのです。それは個人についても都市についても言えると思うのです。とかく明治に始まった近代化のプロセスにおいてそういうアイデンティティー意識が希薄になったり今度は濃くなり過ぎてしまって一種の国粹主義に流れていったりバランスのとれなかった時期が多かったと思うのですけれども、この第2部会の考え方は非常にバランスがとれていて、この2つのことはほんとうに同時並行的に進まない、非常に浅薄な皮相的なものに流れてしまうという危険が大いにあると思いますので、このように取り上げていただいているというのは非常に適切ではないかと思えます。

それから、国際人という表現と地球市民という表現などがありますけれども、こういう言葉も、ややルーズな形で使われることも間々あることですので、どういう意味で我々がここで語っているのかということをごきちん、できるだけ明確にさせることができるのではないかと思います。

それから、これは全体に当てはまることですが、大変すばらしい望ましいことがたくさん描かれているわけですが、横浜らしさということが語られているわりには、では、横浜の独自性、独自の役割、そういうものがどういうところにあるのかということをもうちょっと肉づけができるならばすばらしいなと思えます。比較優位、他と比べてどこが比較優位であるのか。また、これから20年の横浜のビジョンを描いた場合に、どういう点を強調したならば、横浜のイメージがより鮮明になり、役割がより大きくなり、また日本全体のグローバル化、少子高齢化により適切に当面できるまちになり得るのか、ないしは地方自治がより徹底した形で行われ得るのかということについての、何かもうちょっと肉づけがあるならば、これを読む人にもっと説得力を持ち得るのではないかと思います。そのあたりはいかがでしょうか。

**【第3部会長】** 全く委員長のおっしゃるとおりでして、第3部会は、特に最初に出て

きた文章はどここの市でも成り立つようなものしか書かれていませんでしたので、何とか横浜のことをもう少し盛り込んでくれと言って出てきたのが、横浜型小さな政府という言葉で、その内容は委員長のおっしゃるとおりまだ説明がついていないですし、説明が少し頭にはありますけれども、これは別に横浜型でなくてもどこの自治体の小さな政府も同じ内容になりますので、そこの部分がまだ完全に欠落しているなというふうに私自身も思っております。もう少し部会でも議論したいと思いますし、事務局のほうでももう少し横浜というものを正確に表現できるものを考えていきたいと思っておりますので、宿題にさせていただきます。

**【委員長】** よろしくお願ひします。

**【第1部会長】** 今のことと関連して、我々も第1部会で横浜はどんなまちだろうということを議論した中で、例えば自明の理であるかのような国際都市横浜といっても、ほんとうにこれは国際都市なのだろうかという議論も出てきたのです。国際都市というのはどういうふうに定義づけるのかということによっても違うわけですが、国際都市横浜と銘打って、その後の施策を展開していけばいいのか。いや、そうでもないかもしれないという議論が実はあったのです。ですから、横浜とはどんなまちかというのはかなり受けとめ方が違うところがあって、そのあたりもこれから整理をして横浜らしさというのを明確に出していきたいなというところではあります。

否定はしていないのです。国際都市横浜を否定はしていないけれども、確固たる自信を持って言えるかどうか。それは国際都市とはどんなものかという話になりますので、それは第2部会でも多分、国際性や国際都市という議論をされていたことがあるかと思うので、そこも確認させていただければと思っはいたのですが。

**【第2部会長】** このレベルの言葉だけで表現しているといろいろ工夫してもかなり限界があるかもしれないです。我々も議論していて、こういう表現の裏づけになる、なるほどこれかというような事実とか、あるいは具体的な方向性のようなものであるとか、どれだけ細かなものでもいいから、あるバックボーンに基づいてこういうことを言っているのだという説明がつくような内容を組み込めないかという議論がありまして、例えば議論の中で、今、世界各国の船に乗っている船員ですが、高級な船員は、たしかオランダにそれを教育する国際的な教育機関があって、そこで教育する。しかし、多くの一般船員に対する世界的な教育機関はない。特に今、走っている船の多くにアジアのいわゆる高級船員でないレベルの方々が乗っている。そういう方々を教育する学校を横浜につくったらどうか

という意見がありました。それは政策ですけれども、そういう具体的な何かを表現していく。構想自体に入れることはできないにしても、バックボーンとしてこういうのがあって、皆さんがそこから導くことができるというようなものを用意するというのが1つの手かなという議論があります。

もう1つの事例をお話しすると、神奈川県の中で一番農地面積が広い市町村は横浜市なわけです。神奈川はこれだけ広くて山を抱えていますから、横浜は非常に都市化しているから、ほかの地域のほうが農地面積は広いと思っていたのですけれども、農協の代表の方は、山林やなにかは違うと思いますが、農地面積という視点から見ると横浜が一番農地面積が多くて、その農地をこれからの環境の問題にあわせてどのように維持管理して、それに役立てていくかというような議論が場合によっては出てくる。そうすると、神奈川県の中において一番農地面積の多い横浜市の農地をどのように考えていくかということは、これからの横浜市のあり方にとってかなり大きな力を持つてくるというところを、どのような形でこの中にバックボーンとして入れていけるかというようなことを考えるべきではないかという議論がございまして、その辺を全体の今回の構成の中でどのように位置づけて考えていくかということも私は必要ではないかと思っております。

**【委員長】** これは1つの思いつきにすぎないのですけれども、横浜市は国連機関の幾つかの日本事務所を招致しておりまして、FAOとかWF Pの日本事務所がみなとみらいにありますし、国連大学の高等学術研究所も横浜は誘致しておりますし、また非常にすばらしい国際会議場もあるわけですが、そういうものを横浜それ自身の国際化、グローバル化のために食欲に利用しようではないか、またすべきではないかというようにも思うのです。例えば国際会議を一度きりのイベントとして招致するのではなくて、それを継続的、持続的な形で行い、各国のすぐれた専門家や科学者などとのつながりを横浜の国際競争力を強化するために利用する。それから、実は都市人口に対する大学生の割合などは、横浜は東京が近くにあるということもあってか、パーセンテージがかなり低いのですが、そのあたりに関しても、知的な活動を行う場を横浜にもっと誘致する。産学協同に関しても、それを横浜自体の活性化に利用できる可能性を追求することを進められないかどうか。

**【第2部会長】** その辺は私も足りないと思います。今、実は横浜市が具体的に進めている施策でもあるわけですが、例えば東京芸大を呼んできたりバンクアートという活動があったり、実際にそういう機能がかなり横浜に入りつつあります。それをこれからはぜひそういう視点をベースに伸ばしていかなければいけない。その表現が私もまだ十分できてい

ないと思います。おっしゃるとおりだと思います。

【委員長】 ありがとうございます。

事務局などでも何かご意見、コメント、ご感想がありましたら我々の中間案をよりいいものに、より充実したものにするためにどうぞ発言してください。

【事務局】 第2部会に関して、資料12ページを見ていただきたいと思うのですが、第3回の第2部会での議論ですが、部会長からできるだけ具体的なアイデア、それから具体的なキーワードなどをなるべく抽象化しないで残すべきという視点がございまして、12ページの一番右側の欄に具体的アイデアがそれぞれの都市像のイメージにぶら下がっているのですが、その中の3番目に先ほどの国際的な船員の教育機関とか、または6番目に「こんにちは」「ありがとう」程度のさまざまなアジア言語を子どもたちに教育しようとか、それから、次の2番、横浜アピール、これは多彩な個性ということですが、この中では先ほどありました農作物の直売所のネットワークとかアンテナショップの展開とか、それからその次にライトフェスティバルということで、夜景を使った横浜らしい演出をしたらどうかとか、できる限り個々の委員の方の具体的なアイデアを残したいと思っておりますので、まとめ方は非常に難しいのですが、抽象化しまとめるだけではなくて、このような具体的に参考になるような話も各部会から抽出して、このビジョンには盛り込まれなくても、その後の5か年計画において検討する場面も考えておりますので、その中に反映していきたいと思っております。そのような趣旨でまとめをしていきたいと考えております。

【委員長】 ありがとうございます。アジア各国の言語を子どもたちに教育するという点は大変結構だと思います。また、これは日本の各都市において、新幹線の駅での表示が英語、中国語、ハングルという形で、日本語のほかに少なくとも3か国語で表記されているケースが最近増えてきていますが、国際都市を目指す横浜においては予算の許す限りそのような方向に進んだらどうかと思います。

それから、言語教育ですが、文科省が指定しているSELHiという英語教育を特に重視している高校の数は横浜市に今、幾つございますか。

【事務局】 1校です。

【委員長】 1校しかないのですか。

【事務局】 横浜商業高等学校に国際学科という学科を新設いたしまして、そちらはSELHiの認定を受けております。横浜商業高校という学校の中の1つの学科のみが横浜の現在の認定状況でございます。

【委員長】 実は、私は群馬県の外国語教育研究所の非常勤の所長をしておりまして、群馬県にはSELHiに指定されている高校は既に3つあるのです。横浜の人口は群馬県の人口の倍近いわけですから、SELHiが5つぐらいあっても不思議ではないと思うのですが、そういう国際化の中で多様な言語を話し得る、理解し得る人をできるだけ増やすということも必要だと思いますが、そのあたりはいかがでしょうか。

【第2部会長】 制度的な枠組みにもなりますが、横浜の高校はほとんどが県立です。おそらく横浜商業高校は市立ですね。市立が数校しかないのです。そのうちの1校がそれを行っているということだと思います。県立高校の情報はわからないので。

【関係者】 神奈川県立外語短大付属高校と横浜翠稜高校、慶應義塾の藤沢高校、横浜商業高等学校を含め現在この4校がSELHiに指定されています。ただし、慶應は県内ですが横浜市外ですので、市内にあるのは3校です。

【委員長】 ありがとうございます。

【第1部会長】 なかなか高校レベルだけでは片づかない問題ですので、現在、進行形で進んでいる横浜市の教育改革会議の中では、小学校から英語教育を導入しようという提案が既になされております。小学校からスタートして、小学校が変われば中学校も変わる、中学校が変われば高校も変わるという形で、英語教育全体の改革を横浜から提案しようというスケジュールが既に決まっております。それが、平成21年までに全小学校で英語教育を正式に導入するという計画を立てております。それが、横浜というまちの教育戦略の1つです。

【委員長】 ご説明ありがとうございました。

横浜は、国際都市を自認しているわりには、ここに住んでいる外国人の比率は高くないのです。第2部会長もご存じのとおり東京都では港区や新宿区における外国人の比率は極めて高いのです。もっともその内容は港区では欧米系の人がほとんどで、新宿区ではアジア系の人が多いという大きな違いがありますけれども、横浜は中華街が非常に有名ですが、特に中国人が多いということは聞いておりませんし、どうなのでしょう。

【第2部会長】 その辺のデータ整理は我々の部会でも行いました。委員の1人でアメリカのシアトルから横浜国大に来ている学生が、横浜市内の外国人のパーセンテージを町丁別に調査して資料をつくってくれました。それを見るとおもしろい現象がありまして、1つは、やはり中区などの都心部は多いのです。中華街というピンポイントではやはり中国人が多いのです。他にも、郊外部では、県営の公営住宅があるところがあって、そこに

外国人がかなり住んでいます。そういうデータをつくっていろいろ議論はしております。

【委員長】 ありがとうございます。

【第1部会長】 そのあたりは、まちに住んでいる人たちは、実際の生活場面から見ると外国人の多い区もあればそうでない区もあることから受けとめ方も多様化しており、だからこそほんとうに横浜は国際都市と言えるのだろうかという発言も出てくるわけです。ですから、都市全体で考える、または生活を中心にして考えるということでも受けとめ方は微妙に違ってきて、そのあたりも横浜のまちの特徴が出ているのではないかと思います。トータルで国際都市と言いますけれども、その視点もよく踏まえていたほうが良いと思います。

【第2部会長】 市民参加によるまちづくりもいろいろ議論しているのですけれども、逆に言うと、そういう新しいまちづくりの担い手が動き出しているということ、むしろ第3部会が、どのように受けとめて議論されているか。例えば我々ですとNPOや新しい公共を担う人たちが、まちづくりの場面に登場してきているのではないかと議論をしているわけです。それを第3部会のほうでは、ここで言うと市民力という言葉で表現されていたり、地区経営に参画するという言葉が出ていて、そのことが横浜型小さな政府という言葉とどのような関連を持っているのか。市民が参加意識を持って、いろいろなことに参加すると、逆に行政コストが上がるような気もしないのではないのです。そのあたりはどのように理解してどう書き込んだらいいのかと気になってはいます。

【第3部会長】 一例として、都市計画道路をつくる例をお考えいただいたならば、今、古い計画を持っているわけですが、それに対してそれぞれのコミュニティが、ある程度の必要性があると思うならば、そこで地域の人たちが集まって、行政が二、三十年前につくった案に対し、地域として地区としてどういうふうにするかということを決めるぐらいのことをやってほしい。要するにもう二、三十年動いていないわけですから、それを動かすという段階に入ろうという、そのぐらいのことを市民がやってほしいということなので、今まで30年間、行政コストはかかっているかもしれないですが、実質的には本来何らかの形で変化してほしかったものができていないわけで、その間に失ったものは莫大なものがあります。そういう点では実際にこれからは行政コストが少しかかるかもしれませんが、意味のある発展、開発を考える上では当然これから使わなければいけないコストだろうと思います。ですから、ある程度の時間というコストはかかるし、行政の中で調整をしなければいけない、行政と市民とが調整しなければいけないという点では

またコストがかかるかもしれませんが、やはりこれは使わざるを得ないものと思っ  
ていただきたいのです。ただ、今度つくるときは、今までのようにゼネコンさんを連れて  
きて、ただつくるというわけではなくて、当然、税負担的なものも市側から提示されるで  
しょうけれども、地区の人たち自身である程度ファイナンスも考える。自己負担分という  
ような意味もありますけれども、何らかの形で行政コストを落としていくためのファイナ  
ンスの方法やなにかもこの地区で考えてほしい。ある意味ではPFIのようなものをかな  
り幅広く考えて中に埋め込んで、最終的にかかる建設コストは少なくなるというよう  
な、調整といいますか、市民の側が参加をするということと、行政側が小さくなるとい  
うことを達成してほしいというのが今、考えている姿でございます。なかなか難しいと思  
います。

それから、それだけの能力のあるコミュニティーというのは、今のところまだ育って  
いないと思いますから、むしろここではそれを育てることのほうが、今すぐとしては必要  
施策なのだろうと思いますけれども、長期的にはそういう地区経営を自分たちでやるよ  
うなものができていけば、行政との間でもうまくいくのではないかと思います。ついでに言  
えば、これから団塊の世代が大量にやめるわけですから、行政の卒業生が自分のコミュニ  
ティーに参加してほしい。そうすれば行政の悪いところもいいところもわかっている方  
たちですから、うまく調整ができるようになるのではないかと期待しているのですが。行政  
の職員にはそう言っているのですけれども、どうでしょうか。

**【委員長】** 今、コストの問題が出ましたけれども、我々がビジョンを描き、イメージ  
を温め、夢を膨らませていくわけですが、その実現過程は非常に長いものであり、  
段階的に実現に近づけていくという努力を必要としていると思いますが、コストの面も  
もちろん無視してはいけないわけで、このビジョンの実現に向けてというところで、コスト  
意識というものを市民一人ひとりが持たなくてはならないということに触れていただけ  
るといいと思います。

**【第2部会長】** さきほどのご意見に関してですが、横浜はそのような動きを自治体  
の中ではわりあい先駆的にやってきていると思います。例えば都市をつくって、自分たち  
のまちをつくっている。それに参加する。よくいろいろなまちであるのは、とにかく都市  
全体をどうつくるかということと、地区ごとにどういうまちをつくるかということ  
を行政側で一生懸命考えてしまうわけです。ここはこういう形でまちをつくって、そこ  
に市民が参加するという形態をとっているのですけれども、横浜はそうではなくて、  
やる気のないと

ころまで計画をつくる必要はない。やる気のあるところに市も協力して、そのまちづくりにかかわっている。そのプログラムを進める中でやる気がなかったところもやる気を起こしていくというストーリーを、おそらく横浜市はつくっていると思います。それから都市計画道路の見直しの件ですが、あれも横浜が、おそらく全国でも初めてのプログラムとなるような、この道路はいつどういう形でできるのかというところまで市民に提示して、都市計画道路の見直しをしようとしておりますから、それもおそらく市民の話題を呼んで議論があるところだと思いますけれども、かなり新しい仕組みで考えていますから、そういう事実も少しずつ盛り込んでいただくと、それはそれで有効な材料になるのかと思っています。

**【委員長】**      ありがとうございます。

**【第3部会長】**      第1部会と第2部会の両方にも関係するのではないかと思いますけれども、財政の立場からすると、これから20年後というと、基本的には労働力が不足する時代になっているはずなのです。ですから、外国人労働力というものに対してどこまで横浜市が本気で頼るか。といいますか、本気で来てもらえるようにするか。これはかなり日本全体の問題でもありますけれども、おそらく横浜が一番入りやすいまちだという意識がありますから、そういう点で、財政支出がそれなりに必要になるとは思いますけれども、どのぐらいのものをお考えになっているか。ある程度オープンなような気もするのですけれども、あまり積極的にという表現はなさそうな感じでしたので、そのあたりだけ最初にお伺いしておきたいと思います。

**【委員長】**      いかがですか。

**【第1部会長】**      細かいデータを詰めているわけではないのですけれども、労働力の問題で、生産年齢人口の減少を補うために、1つは魅力的な都市政策を展開し若者が集まる、集まってこられるまちづくりをする。それから、ウエルカムな開かれたまちというところで、だれもが横浜に居住してくれるという、ある種の人口政策だと思うのですけれども、そのような部分も不可欠だろうと思います。

それから、外国人についても当然ながら住みやすいまちであるということの中で定住を図り、その社会的な貢献というものも求めていきたいという視点もあります。ただ、どの程度までという細かいところまでは踏み込んでいないわけで、開かれたという部分と、そこに外国人を迎え入れる。そして日本人についても若い層をある程度引きつけるまちというのは想定せざるを得ないだろう。そうしなければ労働力の問題だけでなく、まちの人口

構成上もいろいろな問題が発生してくるだろうという想定をしています。

【委員長】 そのとおりだと思います。

【第2部会長】 労働力という意味ではむしろ第1部会に譲っているので、特に外国人労働者の問題については深く議論はしてはおりません。ただ、観光などの面では、特に外国から来られる観光客に対してどのように我々の都市をアピールし、魅力ある都市にしていくかという議論は必要であって、それは第2部会で審議したいと思っております。

【委員長】 開かれた横浜という文脈の中に、おっしゃったとおり外国人労働者の問題も出てくると思います。我々はあえてタブーを設けなくて審議すべきだと思いますけれども、これは国全体の問題でもあります。外国人労働者といってもこれから目指す方向はおそらく熟練労働者、それぞれのスキルを持った人すなわち日本経済がまさにこれから必要とするであろう人たちを導入するというフォーカスがはっきりしているならば、そういう今までのタブーを乗り越えることができるのではないかと思います。まさにこういう第1部会の言及からも、おそらく外国人が来てアットホームに感じる都市横浜が第1に挙げられるのではないかと感じます。

もう1つ、これもまた基本的には国の問題ですが、団塊の世代があと2年くらいで定年退職を迎えて、これは日本社会にとって大きな問題であるとみんな頭を抱えていますけれども、定年退職というものに対する今までの通念を変えてしまえばいいのではないのでしょうか。

実はきのう、私が会長をしている人口問題協議会がありまして、いろいろな大学の名誉教授の方々から、アメリカの大学には定年というものがあるがそもそも存在しないという発言がありました。創造力を持った優秀な学者は70代でもそれ以後であっても大学に研究室を与えられ、いろいろな活動ができるという言及がありました。そういうことで定年制度を設けてそれに自縛自縛になっているというのはある意味では大変にこっけいな話であって、かといってそれを急にどこか一地域のみを取り除くということになると混乱が起きますし、大きな問題ではあります。いろいろな企業がそれぞれの形でこういう問題に対処していくということを我々としてもおわせていいのではないかと思います。

【第1部会長】 第1部会では働き方ということに関していろいろな意見が出まして、どちらかというと若者とといいますか、ニートなどを含め若い世代のまさに一線で働く人の問題がある一方で、これから年を重ねていく中でみんなが働けるといいますか、ワークシェアという用語があるかもしれませんが、みんなで働けるような社会づくり。こ

れまでは定年という形で区切りをつけていたわけですが、これは20年後を考えると相当重要な課題だろうということも意見として出ています。ですから、これはおそらく第1部会が中心となって議論していく問題だと思っていますので、ぜひ詰めていきたいと思いません。

**【委員長】** よろしくお願ひします。

それでは、そろそろ予定の時間になりましたので、今、審議された事項も含めて各部会の中間とりまとめについてこれからも事務局を含め調整したうえ、中間案を作成し、第2回の総会においてそれを報告させていただきたいと考えます。

具体的には事務局のほうで作業を進めていただいて、適宜、起草委員会の各委員の方々と調整しながら作業を進めていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

次回の起草委員会について事務局から日程のご連絡をお願ひします。

事務局から日程連絡

**【委員長】** それでは、これをもって第1回の起草委員会を終了させていただきたいと思ひます。ありがとうございました。

— 了 —